マツグミの寄生樹種と方言

建　部　恵　潤

マツグミ（Taxillus Kaempferi Danser）は一般にアカマツ、モミ、ツガ、コメツガなどの針葉樹に寄生することが知られている。筆者の見たマツグミの寄生樹種とその自生地を列挙してみるとつぎのようである。

アカマツ：宍粟郡安富町、山崎町、一宮町、赤穂郡上郡町大山寺山、揖保郡新宮町、飾磨郡夢前町、姫路市書写山、加東郡光明寺山、神戸市摩耶山

モ　ミ：宍粟郡安富町、一宮町、山崎町、佐用郡船越山、飾磨郡雪彦山、多可郡金蔵山

ツ　ガ：多可郡金蔵山、兵庫生物、第5巻1号(1965)に山田実氏が“スギに寄生したマツグミ”を報告されているが、筆者もつぎの2例を知っている。

ス　ギ：宍粟郡安富町安志加茂神社、山崎町下牧谷観音堂

どちらも推定250年生の巨木の枝に寄生していたものである。宍粟郡内に多いスギの植林地では見かけないことから、かなり巨木にならないと寄生しないと思われる。巨木では普通枝が高く、また葉が密であるためにマツグミがスギの葉にかくれて見えないことが多く、風で枝が折れたり、伐採した場合しか目にとまらないのであろう。

〔第1図〕　スギに半寄生したマツグミ（建部原図）

筆者の見た安富町加茂神社境内のものは昭和36年の秋台風で折れて落ちた枝についていた。この社叢はモミ、アカマツも多くマツグミ繁殖の適地でスギにもまだ寄生しているものと思う。

山崎町下牧谷観音堂境内では昭和40年3月16日の雪害で折れた枝に寄生していたので判明した（第1図）。

針葉樹に寄生するマツグミが広葉樹に寄生していた報告は未だないようであるが、この珍しい例として、

ヤマナシ：宍粟郡安富町皆河

がある。このヤマナシの自生地は従前から採草地になっていた山の南斜面で、毎年夏には雑草も樹木の若芽も刈ったがヤマナシだけは果実をとるために残され目通り40cmの大木になっていて、それにフジがのぼりついていた。ところが昭和34年春スギの植林をすることになったため33年秋伐採された。10月18日朝写真を撮ったが、その日に伐り倒された。伐採後、見ると広葉樹を寄主とするヤドリギではなくマツグミであった（第2図）。

〔第2図〕　ヤマナシに半寄生したマツグミ（建部原図）

次にマツグミの方言にふれてみることにする。先ず、モチ、またはモチノキは未熟の果実をかんでつくるとりもちから生まれたものである。

また赤穂、佐用、宍粟3郡の千種川流域にホヤという方言が分布している。元来ホヤは平安時代初期に成立した和名類聚抄に寓生（ホヤ）として出ているヤドリギの古名で、それが生態や形態の似たマツグミの方言として西播の一部に現在残されていることは興味深いことといわねばならない。恐らく古くはヤドリギもマツグミも識別せずホヤと呼んだと考えられるが、この古名を現在なお伝承しているのは非常に珍しいことで、他の地方では早くすたれてモチの方言が普及したものと考えられる。

宍粟郡山崎町蔦沢地区にツギキの方言がある。これは寄生しているようすを接木に見たてた名称で、使用範囲が局部的であり、近代的な感じがあるから比較的新しく生まれた方言であろうと思う。

☆　☆
☆